

日本の伝統文化を
自由な心で楽しむ

香川大学 表千家流 茶道部

Kagawa University
Omotesenke
Tea Ceremony

大 学の部活で茶道といえば、どこか女性的なイメージがあります。しかし香川大学の「表千家流茶道部」の部長は男子の杉浦健介さん(経済学部3年)。現在57名いる部員のうち、約半数が男子だそうです。大学内には3つの茶道部がありますが、この表千家流が部員数最多。どうやら男女を問わず、人をひきつける魅力があるようです。

表千家流茶道部の主な活動は週2回の稽古。幸町会館か龍光塾の茶室で、茶道の先生の指導の元、真剣な時間を過ごしています。お稽古で着物に着替えることはほとんどありませんが、地元の和菓子屋さんによる季節のお菓子が出されるなど、やっていることは本格的です。「お茶をやっていると季節を感じられるのがいいですね。お菓子も変わりますし、生けている花や茶器も変わります」と話してくれたのは、副部長の橋本知夜さん(経済学部3年)。橋本さんにとっては「お花の生け方や焼き物器のことなど、日本人としての教養が身につくのも魅力」だそうです。「中にはお菓子が楽しみで部活に参加している部員もいますよ」と教えてくれたのは杉浦さん。「だけど僕はそれもアリだと思っています。茶道が上手になりたいというだけでなく、それぞれの自由な理由があった方がいい」と考えているのです。では、杉浦さんが茶道部を続けている理由は何でしょうか。それは「礼儀作法が身につく

から」だそうです。「お茶会に参加することもあるので、年上の人と接する機会が増えます。気がつく、そういう時にきちんと挨拶ができるようになって、自分の成長を感じました」と、真っ直ぐに答えてくれました。

このように懐の深い茶道部ですが、何かを学生同士で競いあう大会はありません。そのかわり、お茶会が主な目標になっているそうです。各地で催されるお茶会に参加することもそのひとつですが、一番大きな目標は、ほぼ毎年開催している、表千家流茶道部によるお茶会。今年は11月に玉藻公園の披雲閣での開催を予定しています。このときは例年、500人を超えるお客さまが来るそうで、これほどの人数を学生がもてなすのは非常に珍しいケースだとか。茶道の先生などもお客さまとして訪れるので、その時の自分たちの実力が試されます。杉浦さんも橋本さんも、このお茶会の成功に向けて、気の抜けないお稽古が続きます。

さて、表千家流茶道部は、礼儀作法が身につく、教養ができ、人数が多いから友だちもできる上に、おいしいお菓子が食べられることがわかりました。目標となる大きなお茶会もあります。なるほど、これならたくさん部員が集まるのもうなづけます。それぞれが自由な心で楽しむ茶道の経験。でもそれは、長い人生の中でできっと役立つ時があるはずですよ。

信頼できる仲間と挑む
地上最速の格闘技



香川大学ラクロス部 Kagawa Lacrosse Club —Boys and Girls—

男 子ラクロス部の部長・伊藤彰伸さん(農学部3年)と女子ラクロス部の部長・岩田朋佳さん(教育学部3年)。2人が口を揃えて言うのは「ラクロスはハードなスポーツです」ということです。

ラクロスというと、どちらかというと女子のイメージが強く、スカート姿のかわいいユニフォームから、お気やかなスポーツというイメージを持たれがち。でも、2人によると、それは大間違い。女子はマウスピースの装着が義務づけられていますし、男子は防具を着用の上、相手をクロス(ラクロスのラケット)で叩くのがOKというハードさ。地上最速の格闘技とさえ言われているそうです。それほど過酷なスポーツなのに、ずっと続けている理由を伊藤さんは「チームプレイが必要だけど、個人技も生きるといのがおもしろい」と言い、岩田さんは「女子は人数が少ないので、とても団結力ががあります。ラクロスは人数が多いと有利なんです、不利な状況を跳ね返した時の喜びも大きいから」と言います。「ほぼ全員が大学からスタートするスポーツなので、技術的なハンデがないのが魅力」というのは、2人共通の認識です。

現在の部員は男子22人、女子16人。夏に行われる中四国リーグが最大の目標で、ここでの勝利を目指して週3回の練習を行っています。しかし、男子と女子合同での練習はまった

くないそう。というのも、ラクロスは、男子と女子でルールが大きく違うスポーツだからです。

男子の試合は20分クォーター。フィールドに防具を着用した10人が出て、相手を叩いてボールを奪うことが認められています。一方、女子の試合は20分ハーフ。フィールド上に12人が出て、防具の着用はなく、相手を叩くことも禁止です。試合中何人でも選手交代が可能というルールは同じですが、これがラクロスの激しさを表しているとも言えます。

激しいスポーツだからなのかもしれませんが「チームメイトの結束が強い」というのも2人がよく口にする言葉です。男同士ながら「チームメイトの誕生日は欠かせません」と伊藤さんは笑います。

一方女子は、LGK(ラクロス・ガールズ・カガワ)というチーム名を作り、Tシャツを制作。月1回の食事会などラクロス以外のイベントも催して、より深いコミュニケーションを目指しているそうです。「実はLGKは、『ラクロス・ギザ大好き・会』でもあるんです」と、少し照れながら岩田さんが教えてくれました。

試合も練習もハードだけど、信頼できる「仲間」がたくさんできるラクロスという競技は、きっとプレイヤー達の大学生活を鮮やかに彩ってくれるはずですよ。